

# またね、わたしの世界に いないきみへ

音はつき Hatsuki Oto



アルファポリス文庫

【Prologue】

人の一生には、いつか終わりが来るものだ。

きつと君たちも、一度は考えたことがあるのではないだろうか。死んだらどこへ行くのだろう——と。

中国にこんな伝説がある。人は死ぬと、次の人生を歩むために川にかけられた橋を渡る。

橋のたもとで手渡されるのは、特別なスープがなみなみと注がれた器。そのスープを飲むと、前世での記憶をすべて忘れることができるらしい。

なぜそんなものを飲むのかって？

それは、心安らかに転生の道を進めるように。まっさらな状態で、新しい人生を歩

ものに必要なことだからだ。

そんな風にわたしたちの魂は、何度も何度も輪廻<sup>りんねてんせい</sup>転生を繰り返す。

しかし稀<sup>まれ</sup>に、そのスープを拒<sup>こほ</sup>む者がいるという。前世の記憶を持ったまま、生まれ変わりたいと願う者だ。だがそれは、転生するための流れに逆らうことと同じ。そう簡単にその願いが聞き入れられることはない。

彼らが記憶を失わずに転生する方法は、ただひとつ。

冷たい冷たい川の中で、千年という長い年月をひたすらに耐えること。

そうしてやっと、許されるのだ。大切な前世の記憶を持ったまま生まれ変わることを。

そんな彼らの身体には、ある印がつけられる。

それは――

## 【Episodel】

色とりどりの花を、可愛い女の子がばくりと食べる。口に入れたと同時に目を閉じて、幸せそうな表情を浮かべた。

「ええ〜！ めっちゃかわいい〜」

「これ、食べられる花を使ってるらしいよ。外苑<sup>がいえん</sup>前のカフェ<sup>まえ</sup>だって」

顔を寄せ合って、四人で机の上に立てたスマホをじつと見る。

流れているのは、人気インフルエンサーの女の子が綺麗なパフェを食べている

ショート動画。

ただのフルーツパフェではない。

食用花がまるで花畑のようにフルーツの上に飾られている、今話題のフラワーパフェだ。

「ねえねえ、みんなで行こうよ」

わたしのすぐ隣にいた亜弥<sup>あや</sup>の提案に、和菜<sup>かずな</sup>と千秋<sup>ちあき</sup>が「賛成！」と声をそろえる。高校二年生になってもみんなと同じクラスになれたのは、とてもラッキーだったと思う。

二年目の付き合いのわたしたちは、いつも楽しく、平和に過ごしている。

いつものメンバーでフラワーパフェ。かわいすぎる

かわいいパフェの写真と共に投稿するであろう言葉まで、すんなりと思い浮かび、わくわくしてしまう。

「外苑前の駅から近いのかな。行き方調べてみる！」

亜弥が自分のスマホを手にとると、和菜と千秋も同じようにする。わたしも机の上に置いていたスマホを取り、動画のアプリを閉じてカフェについて検索をかけた。

四人で同時に、同じことを検索している。親や先生たちからは「ひとりがやればいいんじゃないの？」と呆れられるけれど、みんなと同じものを調べることに意味があるんだ。

「前にわたし、この近く行ったことある！」

「あー、なんとなく分かるかも」

それぞれの画面で、きつとみんな同じページを見ている。みんなの会話に頷きながら画面をスクロールしていると、とある箇所で指が止まった。

「大人気！ フラワーパフェ 三千円」

さ、さんぜんえん……？

先ほどの動画を見た限り、パフェの大きさは喫茶店のプリンアラモードと同じくらいのごちまりとしたサイズだった。いいところ、千五百円くらいだと思っていたのに……。この大きさは、ひとつをみんなでシェア、みたいなことも難しそう。そう思っていたら、おひとりさま、ワンドリンク、ワンフードのご注文をお願いしていますと書かれているのを見つけて、思わず息をのんでしまった。

「沙幸<sup>さゆき</sup>、どうかした？」

わたしが固まっているのに気付いた千秋が、小首を傾げる。

正直に言えば、この値段にかなり怖気ついている。ドリンクも入れたら四千円くらいはかかりそうだ。

どう考えても、お金が足りない。だけどそんなこと、恥ずかしくてみんなには言えなかった。

「ううん！ なんでもない！ すっごい楽しみ！」

笑顔を作り再び会話に戻るも、頭の中では電卓を叩いていた。

お小遣いは月六千円。

正直足りないけれど、お母さんからは「スマホ代も払ってるんだから。お金は湯水のように湧いてこないのよ」と言われ、お年玉を切り崩しながらどうにかやっている。今回もそうするしかない。

ちなみにアルバイトは学校で禁止。ここはいわゆる進学校で、勉強に集中するためという理由がある。こっそりバイトをしている子たちもいるけれど、その子たちはクラスのトップ層にいるキラキラしている子たちだ。頭もそれなりによくて、華やかで流行に敏感でみんなから一目置かれる存在。

そしてわたしたちは、表立っては言わないけれど、そんな彼らにひっそりと憧れている、いわゆる「普通」の四人組。華やかな人気者ではないけれど、どんな子たちとも「普通」にコミュニケーションを取れる立ち位置といった感じ。

そんなわたしたちのスマホが、同時にびろりと軽やかな通知音を鳴らす。

「あっ、RNだ」

Right Now、通称RNは、今大流行している新感覚のSNSだ。通知音が鳴ったら一時間以内に写真や動画にその時の自分を収めて投稿し、友人同士でシェアするもの。

どこにいるかという位置情報も同時に投稿できるので、近くにいる友人同士で合流することも可能だ。

「みんなで撮ろっ。いくよー」

亜弥の声かけに、四人分のピースサインを机の上で合わせる。もう一人いれば綺麗な五つ星になるけれど、四人なのでキラキラマークのような四つ星形だ。

学校にいる間にRNの通知が来たときは、わたしたちは大体この四つ星を投稿している。過去の投稿一覧が変わり映えしない原因のひとつでもある。

「わ、しいちゃんかわいい」

投稿を終えた和葉が、スマホの画面をこちらに向ける。

RNでは自分の近況を投稿すると、繋がっているフレンドの投稿が表示されるようになる。

しいちゃんというのは、うちの学年で一番かわいい女の子だ。いや、学校一と言っ

でもいい。

「本当だ、いつの間にこんなかわいいの撮ったんだろう」

しいちゃんの投稿は、板チョコを齧<sup>かじ</sup>っている自撮り写真。くりくりとした瞳に、控えめな鼻、桜色の唇。シャンプーのCMのオファーがいつ来てもおかしくない、つやつやの綺麗なロングヘア。

正直わたしは、どんなインフルエンサーやアイドルよりも、しいちゃんが一番かわいいと思っている。

いつもしいちゃんと一緒にいる子たちの投稿も次々と流れてきた。

彼女たちの今のブームはこの板チョコショットらしいと分かるぐらい、おんなじポーズだ。

わたしたちは顔を見合わせて「あとで購買でチョコ買っちゃう？」なんて笑い合った。



帰りのホームルームが終わると、廊下からひよこりと幼馴染が顔を出した。

「ユキ、委員会行ける？」

まえだこうたろう  
前田幸太郎、通称コタ。幼馴染である彼は隣のクラスだ。

身長はわたしよりちょっとだけ大きい、百六十七センチ。男子の中では小柄な方で、色白でほっそりとしている。黒いサラサラの髪のに大きな黒縁の眼鏡が似合うのは、コタが綺麗な顔立ちをしているからだ。

「コタ、早かったね。もう二組終わったんだ」

廊下側の一番後ろの席のわたしは、リュックに荷物を詰めながらコタに返事をする。コタとわたしは、お互いに今年図書委員になった。今日は週に一回の、図書室当番の日だ。

「あ、前田くん。やつほー」

荷物をまとめた亜弥たちが来て、コタに手を振る。去年はコタもわたしたちと同じクラスだったのに、極度の人見知りのコタは、そんな亜弥たちに小さく会釈をするだけ。

「コタ、新しいクラスでやっていける……?」

口数も少なく、愛想もほとんどないコタのことを、わたしは幼馴染として心から心配している。でもそんなわたしの肩を亜弥がぽんと叩いた。

「沙幸、大丈夫だよ。前田くんはそういうところがいいんだから」

「そうそう、みんな分かっているよねー」

亜弥たちの言葉に、わたしは小さくため息をつく。

確かにみんなの言う通り。コタは人見知りで目立つようなタイプではないものの、決してクラスで浮いたりしているわけではない。不思議なことに、男女問わず人気のある子たちからも好かれていて、放課後に遊びに行こうなんてよく誘われている。本人がそれに乗ったところは、一度も見たことがないけど。

そんなコタとわたしは、生まれたときから一緒だった。というのも、母親同士が同じ産院で同じ日に出産をしたからだ。

わたしの方が、コタよりも三時間ほど早く生まれた。新生児室で並んで眠っている写真を、これまでお母さんから何度見せられてきたことか。

家が近所なこともあり、公園で共に遊び、同じ保育園に入園し、小学校中学校、そして高校とずっと一緒に腐れ縁だ。

家族同然といってもいいかもしれない。

コタはいいことも悪いことも、わたしの過去を全部知っている。

お母さんの高い口紅を下手くそに塗りたい顔に、秘密基地で作った足の大きな傷。三十三点の数学のテストに、意地悪で机に入れられた不幸の手紙。初めてもらったラブレターに、校舎裏にチョークで書いたデタラメな相合傘の落書き。バレンタインに失敗したブラウニーは、義理チョコとしてコタにあげた。

わたしはなんでもコタに見せ、話し、共有してきた。

だからこそ、ドキドキするような展開なんか、わたしたちの間には存在しない。

「じゃあ、また明日ね。沙幸、図書委員頑張ってるね」

わたし以外の三人は勉強しがてら、新作のドリンクを飲みにかフェに行くらしい。本当はわたしも行きたかったけれど、フラワーパフェのことを考えれば、行けなくてよかったかもしれない。だってその新作のドリンクだって、八百円近くするから。

あとでRNに投稿されるであろう、三人おそろいのドリンクの画像を想像すると気持ちが落ち着かなくなったけど、どうにかそれをやり過ぎす。

その時間帯のRNに、「図書委員の日。わたしも新作ドリンク飲みたかった」と

本や廊下の写真と共に投稿すればいいだけだ。亜弥たちは事情が分かっているけど、他の子にわたしがグループ内で浮いていると勘違いされたくはない。

「じゃ、行くか」

「うん」

コタとふたり、並んで廊下を歩く。すれ違う人たちが「前田くんバイバイ」とか「前田、また明日な」なんて声をかけていく。それに対してコタは、毎回会釈するだけ。

ずるい。人気者になるために何かをしているわけでもなく、コタはコタのまま、飾らないほどに自然体だ。それでいて、こんなにたくさんの人に愛されている。

「コタはいいなあ」

「なにが？」

「なんだかんだで人気者なんでもん、ずるい」

「別にそんなのどうでもよくない？」

「そうやって言えるのもずるい。コタはずるい」

わたしが唇を尖らせると、コタは「はいはい」と軽いなす。小さい頃は、背も低

かったコタをわたしが引つ張っていたはずなのに、最近ではすっかりわたしの方が子ども扱いされることが多い。

「ユキも何か飲む？」

「ううん、まだあるから平気」

自動販売機の前で立ち止まったコタは、小銭を入れてボタンを押す。そうして出てきたペットボトルを取り出すと「冷えてない」と顔をしかめた。

昔からコタは、冷たい飲み物、しかもキンキンに冷えたものを好んでいる。

真冬の雪の日も、体調不良で寝込んでいるときにも、コタが飲むのは冷たい飲み物。しかもそれはコタだけでなく、前田家全員だというのだから、家庭環境が与える影響というのとはとても大きいと思わざるをえない。

前田家には、家族それぞれの指定のグラスが用意されていて、頻繁に遊びに行くわたしのものも決まっていた。コタのものは、青色のラインが入った背の高いグラスで、わたしのものはコロンとしたフォルムのネコの模様が入ったもの。

わたしが行くと、コタのお母さんは冬でもそこに氷を入れようとすることから、最近では氷なしでお願いするようにしている。



「げ、やつばぬるい」

仕方なさそうにペットボトルの蓋を開けたコタは、一口飲むと顔をしかめた。  
わたしはそんなコタに自慢するように言う。

「今度ね、みんなでフラワーパフェを食べに行くの」

「へえ、花でできてんの？」

「食べられるお花が、いっぱい飾られてるパフェなんだよ」

「なるほど」

「三千円だって。このくらいの大きさで」

値段まで言ってしまうのは、コタが相手だから。

両方の人差し指と親指で丸を作って見せると、コタは眉根に皺を寄せた。

「げ、高」

「だよね、高いよね」

やつぱり、そう言ってくれると思った。

亜弥たちにはケチだと思われたくなくて言えないけれど、コタの前では本音も言える。

「で、行くの？」

「もちろん行くよ！ 女子高生はかわいいものを常に追い求めているんだから！」

わたしがそう意気込むと、コタはやつぱり「ふうん」と大した興味もなさそうに頷いた。

テスト前の図書室は、普段よりも生徒の数が多い。しかし大半が勉強目当てなので、本の貸し出し作業はほとんどない。

「これ、借りたいんだけど……」

カウンターでコタと並んで勉強をしていると、正面から声をかけられた。難しい箇所だったから、誰かが立っていることに気付かなかった。

「はい……って、しいちゃん！」

そこにいたのは、みんな大好きしいちゃんだ。

しいちゃんは美少女だけでなく、クラスのみんなに分け隔てなく優しい。しつかりとしたメイクをしているわけでも、大きな瞳のカラコンをつけているわけでもないのに、少女漫画の主人公のように完成されている。

クラスのトップ中のトップだというのに、それを鼻にかけることもなく、なんなら本人はそんなことを気にしていないようにも見える。そういうところも、クラスの多くがしいちゃんと仲良くなりたと思う理由だった。

そんなしいちゃんと話せることに、わたしはなんとなく浮き立ってしまった。推し、ってこういう感じなのかも。

「しいちゃん、図書室来てたんだね」

「勉強しようと思ったんだけど、本棚にあった小説が気になっちゃって」

そう言っ正しいしいちゃんは、ちらりとコタの方を見る。

わたしはそうだ、と思っコタをつついた。

「そういえばこの本、ちょっと前に読んでなかったっけ？」

問題集に取り組んでいたコタは、そこでやっ顔を上げる。カウンターのの上に置かれた小説を一瞥すると「うん、読んだ」と言っ。

しいちゃんは片手で髪を耳にかけながら、コタの方を見た。

「前田くん、本読むの好きなの？」

しいちゃんとコタは、去年も今年も違っクラスだ。あのしいちゃんがコタのことを

知っていることにちよっただけ驚く。

コタは不思議そうに顔を上げ、それからもう一度小説に目を落として「うん」とだけ言っ。

……しいちゃん相手にも、こんな態度を貫くなんて！ 無礼だぞ。

「ごめんねしいちゃん、前田は極度の人見知りで」

わたしが慌ててフォローするも、コタは全然気にしていない。しいちゃんも「うん、大丈夫だよ」と天使の笑顔を返してくれたから、それだけでわたしは嬉しくなっ。

教室では、しいちゃんとかうやって話す機会はなかなかない。彼女と会話しているだけで、自分まで特別な存在になっような気がしてしまっ。

そのとき、ポケットでスマホが震えた。

しいちゃんも同じだっようで、二人同時にスマホを取り出す。

「あ、RN」

わたしたちはなんとなく顔を見合わせる。吸い込まれそうな黒い瞳に見つめられ、自分でも気付かないうちに、大胆な言葉が口から飛び出た。

「い、一緒にRN撮らない？」

我ながら大胆なことを言ったと思う。それでもここが教室ではないこと、お互いにいつも一緒にいる子たちがいないという状況が、わたしに思い切ったことをさせた。

「それじゃいっくよ」

しいちゃんと一緒に、本で顔を隠して写真を撮る。

顔が見えない、本を持ったふたりの女の子の写真。

「これ、投稿してもいい……？」

「もちろんだよ」

しいちゃんの快い返事に、胸の中に嬉しさが広がっていく。一緒に投稿する文章は何にしようかな。そんなことを考えていると、しいちゃんがためらいがちに質問してきた。

「沙幸ちゃんって、前田くんと付き合ってるの？」

「ううん、ただの幼馴染だよ」

中学の頃から、この質問は何度も何度もされてきた。

わたしたちはお互いをあだ名で呼ぶし、家が近いからタイミングが合えば一緒に登

校したり下校したりもする。特にコタが人見知りなこともあり、わたしたちが特別な仲間じゃないかと思う人は多いみたいだ。

「同じ日に同じ病院で生まれたの。親同士も仲良いから、家族みたいな感じかな」

「そっか。だからすごく仲良さそうなんだね」

でもコタのことを、恋愛対象として見たことはない。そんなことを感じる以前に、コタはわたしにとって当たり前に身近にいる存在だったから。

他の人に聞かれたときと同じように答えながら、頭の中では投稿する文章のことでいっぱいだ。

委員会の日。読むぞ

しいちゃんと撮ったことが自慢しているように見えるのも困るし、このくらいがちょうどよさそう。

「せーので投稿しよう」

「うん、いいよ」

「せーのっ」

同じアングルの二枚の写真が、同時にRNの世界に飛んでいく。そのときわたしは、

これまで感じたことのないような高揚感に包まれていた。



『もしかして、隣にいるのしいちゃん？ 二人ともかわいい〜』

その日、わたしのRNの投稿には亜弥たちからのコメントがたくさんついた。

「しいちゃんと撮っちゃった……嘘みたい……」

夜十一時。自分の部屋でベッドに入ったわたしは、RNのアプリアイコンをタップした。

代わり映えのしない、自分の投稿一覧。その中で、最新の一枚だけが輝いて見える。しいちゃんとふたりで写真を撮った。

しいちゃんもそれを、RNに投稿してくれた。

帰り道、コタにそれがいかにすごいかを熱く報告したのだけど、「ふうん、よかったね」と興味なさそうに言われた。

これがどれだけのビッグニュースか、コタは分かっているんだ。

しいちゃんのプロフィールページを見ると、どれもかわいくっておしゃれな投稿ばかり。週末にはいつも、都内のいろんなカフェに行っているみたいだ。

「やっぱり、しいちゃんはすごいなあ」

プロフィール欄にもc a f eの文字が入っている。前に、趣味はカフェ巡りって言うていたっけ。

再び写真を指先でスクロールし、一際きらきらした一枚をタップした。

「わあ、ピクシーランドの写真だ。かわいすぎる……」

大人気のテーマパークで一枚。キャラクターのぬいぐるみの帽子をかぶったしいちゃんたちが、チュロスを手手に俯き加減で映っている。その時期にやっていたイベントのグッズをたくさん身に着けていて、華やかでかわいらしい。

「もう何年もピクシーランド行ってないなあ」

小さい頃に大好きだったピクシーランド。

昔は家族でよく行っていたけれど、中学になってからは部活が忙しくてなかなか行けなくなり、高校に入ってから金銭的な理由もあり足が遠のいた。

だって、一日遊ぶためのパスポートが一万円近くもするのだから。お母さんも、

「昔は五千円で行けたのにねえ」とため息をついていた。

交通費に食事代、その上グッズを買い揃えるとなると、一日で三万円くらいは飛んでしまうはず。それなのに、しいちゃんたちは何か月に一度はピクシーランドに行っている。

たくさんグッズを身に着けている写真、ピクシーランドのお城の前で手を繋いでジャンプする楽しそうな動画、カラフルでかわいいフードやドリンク。

「いいなあ、わたしもピクシーランドでこういうの撮りたい」

そうは言ってみても、現実では無理なことは分かっている。亜弥たちとも「ピクシーランドに行きたいね」と話してはいるけれど、実際には実現できていない。

「どう頑張っても、しいちゃんにはなれないんだなあ……」

しいちゃんの投稿一覧を見たあとに自分のページに戻ると、その色合いの差にがっかりときてしまう。ふたりで写真を撮って投稿したという喜びや高揚感は、あつという間に色あせてしまった。

たった一枚、一緒に撮った写真をふたりでRNに投稿しただけ。だからなんだというのだろうか。

どうしようもない虚しさが、わたしの心を覆っていった。



外苑前は街路樹ひとつとってもオシャレで、すれ違うみんながインフルエンサーやモデルに見える。そんな場所にいる自分たちも、普段よりも一歩大人になったみたいだった。

「わっっ！ かわいいっ！」

白を基調とした洗練されたカフェで歓声を上げる。

ある日曜日。わたしたちは四人揃ってフラワーパフェを食べに来ていた。

「本物だあ……、やばいかわいすぎる……！」

合計四つのフラワーパフェが運ばれてきて、わたしたちは撮影を始める。

周りのお客さんも写真を撮るのが主な目当てなようで、あちこちでパシャパシャとシャッターを切る音が聞こえてくる。

フラワーパフェは、背が低くて丸いグラスに入れられていた。

一番下には桜色のジュレ、その上にシリアルが敷き詰められ、バナナとストロベリーアイスがワンスクープずつ。その上に、高級いちごと食用花がセンス良く散りばめられている。あしらわれている花の種類や配置はパフェによって微妙に異なっていて、それがまたおしゃれな雰囲気を増させていた。

「ちよっとアイステイも入れたいよね、このグラスもおしゃれだし」

ひとりにつき、ワンドリンク・ワンフード制。

わたしたちはそれぞれにフラワーパフェとアイステイを注文していた。ドリンクに関しては相談したわけじゃなかったけれど、なんとなく、みんな同じものを頼んでいた。

「ひとりずつ食べてるとこ、動画撮らない？」

千秋の提案に、わたしたちはすぐに同意する。その前にまずは鏡で前髪をチェック。そのタイミングでちょうど、RNの通知が鳴った。

RNからの通知はランダムだ。それでも午前中に一度、お昼時から午後三時にかけて一度、放課後の時間帯から夜にかけて一度、となんとなくの法則みたいなものがある。

実際に今日だって、RNから通知がきそうな時間帯を予想して、何週間も前に予約をした。

「RN、分かってる！ よしっ、急いで撮って投稿しよ！」

嬉しそうな亜弥に、みんなで盛り上がる。フラワーパフェを食べにきた一番の目的は、RNに投稿することなのだから。

フラワーパフェを両手で持ったり、ぱくっとお花を食べて肩を震わせてみたり、スプーンを口元にあててみたり。

そうして全員が投稿を終えた頃には、アイスはとろりと溶けていて、花たちは半分飲み込まれるように沈んでいた。

カフェを出て、青々としたイチヨウ並木を歩く。前に行くのは亜弥と千秋で、その後ろを和菜とわたしが並んでついていくような形だった。

「あっ、コメント来てる！ 今までで一番のハート数かも！」

亜弥がスマホを片手に興奮するように言い、千秋が「わたしも！」と声を跳ねさせる。

わたしたちは四人で、それぞれのフラワーパフェの動画を投稿した。RNで繋がっているのは中学や高校の友達が大半だから、共通のフレンドも多くいる。きっとわたしの動画にも、普段よりも多くの反応がついているのだろう。

それでもなんとなく、スマホを見る気にはなれなかった。

「沙幸、大丈夫？ 体調悪い？」

隣の和葉が、そんなわたしに気付いてそっと声をかけてくれる。

気を遣ってか、前の二人には聞こえないように。

「そんなことないよ、大丈夫」

心配をかけまいと、いつものように明るい笑顔を見せると、和葉はほっとした様子を見せてからスマホでRNを開いた。

わたし以外の全員が、視線を手元のスマホに向けている。

そういえば今日、みんなと目が合ったのは何回だったかな。話をしている、笑い合っている、いつだって視線はスマホの中に固定されている。きっと普段は、わたしだってそうなんだろう。

三人に気付かれぬよう、そっと息を吐き出す。

今日のお会計は、アイステイーと合わせて四千百八十円。パフェは三千円と書いてあったけど、それは税抜き価格で、実際にはこんな金額になってしまった。

パフェを食べる頃にはアイスはどろどろに溶けていて、まったくとした口当たりにお水ばかり飲んでしまった。あんなに綺麗だったお花もしんなりとしてしまって、食べてみてもなんの味もしなかった。シリアルも水分を吸ってしまい、歯ごたえもあまりない。

さらにはアイステイーも氷がとけたら香りが薄くて、水と変わらないような感じに思えた。

「いいの撮れてよかったね！」

なおも視線はスマホのままのみんなの言葉に、わたしも勢いをつけて頷く。

「ね、来てよかったー」

——本当にそう思ってる？

もうひとりの自分がわたしに聞く。

確にかわいい動画や写真は撮れたけど、食べ頃を過ぎたパフェはお世辞にもおいしいとは言えなくて、お財布の中だってすっかり空っぽ。切り崩しながら使っている

お年玉だって、いつまでもあるわけじゃない。

憧れていたフラワーバフェの投稿ができて満足しているはずなのに、どうしようもない虚しさが胸を支配している。

「あつ、RN！ みんなで撮ろ！」

再び鳴り響く通知音。外苑前であることが分かるイチヨウ並木をバックに、わたしたちは顔をピースで隠すようにして写真を撮った。

みんなに嘘をついている罪悪感と、早く帰りたいと思ってしまうことへの自己嫌悪と、抑えきれない虚無感と。

——いつまでこんなことを続けるんだろう。いつまでこんな状況が続くんだろう。笑顔の仮面の中、わたしがそう呟いたのが聞こえた気がした。



そこは誰もいない、見知らぬ公園だった。

さびれたブランコに、コンクリート製の大きな山型の滑り台。ところどころ塗装が

剥げたざらざらとした動物の置物が等間隔で並んでいる。

滑り台の下の中のトンネルの中で、わたしは小さく震えていた。

気がついたらこの場所にいた。

呼吸はできているはずなのに酸素は薄く感じてしまうし、意識ははつきりしてるのになんだか夢を見ているように現実味がない。

色んな音が鼓膜を揺らすも一枚布を被ったようにぼんやりと響くだけで、目に映るのは無機質なコンクリートでできた壁のみだ。

ここはどこなのだろう。

今は何時なのだろう。

どうしてこの場所にいるのだろう。

……わたしは一体、誰なんだろう？

無意識に制服のポケットに手を入れる。

「あれ……ない……」

何がないのか、分からない。それでも何かがないということは分かる。

焦燥感が足元から駆け上がり、わたしはあたふたと左右のポケット、内ポケットか



らスカートのポケットに手を入れて確認する。

「ない……。なんにも……」

一体何を探しているのかも分からないのに、大きな絶望感がわたしを襲う。そして気付いてしまった。今のわたしには、身に着けているこの制服以外、本当に何も無いのだということに。

「ま、まずは落ち着かないと」

心細さと不安でどうにかなりそう。しかしそんなことをしても、きっと何も解決しない。まずは冷静になって、ちゃんと考えなきゃ。

無理矢理に深呼吸をしていると、ふわりとした柔らかな感触が、脛<sup>すね</sup>のあたりを掠めていった。

「……猫？」

そこにいたのは、黄色い目をクリッとさせた痩せ<sup>や</sup>っぽいの黒猫。

こちらを見上げると「ミャア」と目を細めて鳴く。その存在は、張り詰めていた気持ちを少しだけ和<sup>やわ</sup>らげてくれる。

「きみもひとりなの……？」

首輪などもししていないし、カリカリに痩<sup>や</sup>せた体を見る限り野良猫なのだろう。

黒猫は伸ばしたわたしの手をさらりとかわすも、数秒すると鼻先をくんくんさせながら一歩二歩とこちらに再び近づいてくる。それからわたしは害がないと思ったのか、すりつともう一度手元に体を寄せた。

「かわいい……」

背中をゆっくり撫でると、黒猫は気持ちよさそうに体を伸ばし、ゴロゴロと喉を鳴らす。

孤独なわたしを受け入れてくれたようで、小さく笑みが浮かんだ時だった。

「――あれ？」

公園の街灯越しに、黒い影がトンネルの中までずつと伸びる。

「クロ、友達か？」

トンネルの入り口に、ひとりの男の人がしゃがみ込んだ。

無意識にびくりと体が跳ねてしまう。わたしの手元にいた黒猫はそれに驚いたのか、トンネルの入り口へと小走りしていく。

「よしよし、腹減っただろ。今日こそは一緒に帰るからな」

ワシワシと黒猫の頭を撫でた男の人は、そう言うてからこちらへと目を向けた。薄茶色の髪の毛に、焦茶色の瞳。年齢はわたしより少し上くらいかもしれない。優しそうな雰囲気<sup>まじ</sup>を纏った彼に見つめられ、思わず息を呑んだ。とても懐かしい気がしたからだ。

もしかしたらこの人は、わたしがどこの誰なのかを知っているのかも――

「もう十時過ぎてるけど大丈夫？ 駅か家まで送ろうか？」

しかし返ってきたその言葉に、わたしは小さく肩を落とした。

この人も、わたしがどこの誰かを知らないんだ。

大きな絶望感が改めて両肩にのしかかってくる。ぎゅ、と両膝を抱えると、別の声が彼の後ろから聞こえてきた。

「颯斗<sup>はんと</sup>、クロいた？ ……って、女の子？」

「そう。何も言わなくてさ」

わたしに最初に声をかけてくれた彼は、はやとという名前らしい。記憶なんてないけれど、その名前を聞いても何も感じないから、やっぱりわたしたちは初対面なのだろう。

彼は黒猫をひょいと胸元へ抱き上げ、優しく撫でる。

「家出少女とか？ とりあえず警察じゃないの」

会話に出てきた警察という言葉に、反射的に顔を上げた。

「け、警察はやだ……！」

二人は驚いたようにこちらを見る。最初に声をかけてくれた人の後ろにいるのは、金髪をツンツンと尖<sup>とが</sup>らせた同じ年かもう少し上くらいの男性。両耳に大きなシルバーのピアスをいくつもつけている彼の背中には、派手で真つ赤なギターケース。

怖い人かもしれないと思い、つい目をそらした。

「悠<sup>ゆう</sup>、怖がらせるなよ」

「なんだよ俺かよ!? こんなに心優しいのに!？」

最初の彼が『はやと』で、金髪が『ゆう』。頭の中で、ふたりの名前と顔を一致させていく。

「よかった、声が出ないとかじゃなくて」

大袈裟に頭を抱える悠の声を無視し、颯斗はわたしにゆっくりと穏やかな声で話しかける。

わたしに不安を与えないようにしてくれているのが分かり、ちょっとだけ警戒心がゆるむ。

「えーっと、家はどこ？」

わたしが首を横に振ると、二人は顔を見合わせた。

「それじゃあ、名前は？」

「……ユキ、だと思っ」

自然に声が出た。

自分が誰なのかも分からないのに、それだけはわかる。頭の中のどこかで何度も、誰かにそうやって呼ばれ続けている気がするから。

「ユキは誰かを待ってる？ 行くところはあるの？」

颯斗が気遣うように聞いてくれて、わたしは再び首を横に振る。

心細くてたまらなかった。これから自分がどうなるのか、どうしたらいいのか、何ひとつ分からない。こうして正直に言ったところで、警察に引き渡されてしまうのが当然の流れだろう。

「どうするか……」と颯斗が唸ったのと、「じゃあうちに来ればいいじゃん！」と悠

が明るく言ったのが同時だった。

驚いて二人を見ると、颯斗が悠を呆れたように見ている。

悠はあっけらかんと言った。

「だってさ、警察やだって言ってたじゃん。それで行くところもないんでしょ。しかも記憶喪失とか、放つとけないじゃん」

「俺だって放っておくつもりはないけど、いきなりうちに連れてくのはまずいだろ」

「なんで？ いいじゃん、部屋なら余ってるし」

「そういう問題じゃなくって」

「じゃあユッキーに聞けばいいじゃん。なあ、うち来る？」

目の前で繰り返しられる言葉のやりとりを眺めるしかなかったわたしに、金髪の彼が最後の問いを投げる。

最初の彼が窺うようにこちらを見て、わたしは改めて二人の顔を交互に見つめた。ここにひとりではいたくない。それに、会ったばかりだけどふたりのことを信用していい気がした。

「行きたい、です」

そう最後まで言い終わる前に、限界を超えた空っぽのお腹がギュルルと間拔けな音を出す。合わせるように、黒猫が「ミャア」とひと鳴き。

「よっしゃ、帰って夕飯にすんぞー」

金髪は張り切るように袖をまくると、満面の笑みでわたしに手を差し出した。

「いやいやなんで颯斗なわけ？ 手、出したの俺だったんですけどー」

金髪の彼は両手を頭の後ろで組みながら、大きな歩幅で進んでいく。

ちやりんちやりんとギターケースにぶら下がる魔除け人形のような怪しい、だけどころとかわいらしいキーホルダーがそのたびに音を立て揺れた。

「刷り込みだろ。卵から孵<sup>かえ</sup>ったヒナが最初に見たものを親だと思っというあれみたいなもんだよ、きつと」

颯斗はそう言いながら、わたしのことを振り返った。彼の黒いリュックサックの紐を、わたしはぎゅっと握りながら歩いてた。

どこを歩いても見知らぬ景色ばかりで、手ぶらで歩いていたら再び迷子になってしまいそうな気がしたから。

「クロは野良猫で、ずっと家に連れ帰らなかったんだけど。いざとなるとすぐに逃げちゃってさ」

颯斗は彼がああ公園に来た経緯を話してくれる。

明日は台風予報で、今夜こそあの黒猫を絶対に連れ帰るぞと意気込んでいったところ、膝を抱えるわたしがいたというわけだ。

「クロ一匹連れ帰るのも、もうひとり増えるのも変わんないっしょ」

あつからかんとした悠の物言いは、この状況をそこまで深刻に考えなくてもいいと思わせてくれるようで心が軽くなる。それと同時に、本当にこんな軽くて大丈夫なのかと不安にもなるので、現実的な颯斗とはいいいコンビなのかもしれない。

「家に帰ったら、何かおいしいもんでも作ってもらえばいいよ」

そう言う悠がわたしに差し出したのは、真四角のころんとした小さなキャンディ。

ピンク色と黄緑色のものがひとつの袋の中にかわいらしく並んでいる。指先に力が入らずぺりぺりと袋の端に苦戦していれば、立ち止まった颯斗がそれを開けてくれた。

「作ってもらえばいいって、葵<sup>あおい</sup>が家にいるか分からないだろ」

「いるね。俺の予想では葵は今日、家から一歩も出てないはず！」

自信満々に答える悠に、ため息をつく颯斗。

どうやらこれから向かう場所には、葵さんという人がいるらしい。

悠がくれたキャンディは、どこか懐かしい甘味と共に心を柔らかくしてくれた。

「到着！」という声と共に悠が足を止めたのは、大きな一軒家の前。庭先で咲き誇る白い花の香りが、ふわりとわたしの頬を撫でる。

……なんだっけこの香り……ジャスミン？

思わず鼻をスンと鳴らすと、颯斗が「ジャスミンだよ」と教えてくれる。すごい。どうしてわたしが考えていたことが分かったんだろう。

それにしても、大きな家だ。

颯斗も悠も、わたしより少し年上くらいに見える。ふたりの話から、数人で暮らしているのだとは思っていたけれど、まさかこんな立派な一軒家に住んでいたなんて。もしかして、ふたりは友達じゃなくて兄弟なのかもしれない。

「緊張してる？」

家を見上げていると、颯斗が小首を傾げながらわたしを見る。

「あの、ご両親とかは……？」

颯斗と悠は、わたしを警察に連れていくようなことはしなかった。

しかし、大人はそれを許してはくれないはずだ。再び行き場をなくす未来が見えた気がして、思わず身を硬くする。

そうこうしている間にも、悠は「ただいまー」と躊躇なく玄関扉を押し開ける。

「大丈夫。そういう大人はいないから」

颯斗はそう言いながら、悠に続くようにとわたしの背中をそっと押す。戸惑いつつ大きな玄関に足を踏み入れると、石鹸のような香りに包まれた。お香のような異国風の香りも混ざっているように感じる。

自分が生活していると気が付かないが、家には独特の匂いというものがある。甘い匂いがする家、南の国みたいな匂いがする家、ちよっと苦い匂いがする家。それでも全ての匂いに共通するのは、ここで誰かが生活しているんだと感じさせる安心感を持っていること。この家も例外ではなく、優しい匂いはわたしの心をふわりと包み込んでいる。

「おかえりー。チャーハン作ってるけど、食う？」

奥から聞こえてきた女の子の声に、どきんと心臓が飛び跳ねる。

もしかして、悠が話していた葵さんだろうか。

その人が同性であるということに、ほっとすると同時に緊張感が高まっていく。颯斗と悠は、彼女には何も言わずわたしのことを連れてきている。もしかしたら、葵さんはわたしのことを歓迎してくれないかもしれない。

玄関に上がるのをためらっていると、そんな気持ちをくみ取ったのか、颯斗は安心させるように頷いた。

「ほら！ やっぱり葵、うちにいたじゃん！」

一歩先にリビングまで進んだ悠が誇らしげにこちらに言うと、ひょこりとドアから小さな顔が覗く。黒髪のコールドなボブスタイルに翡翠色ひすいの瞳の綺麗な子だ。

「あ！ 女の子だ！ 颯斗の？ それとも悠の？ あーっ、クロやっとな連れてこれたんだ！」

言いたいことだけを言って、葵さんは、「焦げる！」とお玉片手にすぐキッチンへと戻っていく。

「葵は嵐みたいだから」

よかった、わたしが来たことを悪くは思っていないさそうだった。サバサバとしていて、優しそう。さっきまでの心配は、葵さんの笑顔で吹き飛ばされた。

颯斗に促されるままリビングへ足を踏み入れると、そこは香ばしいお醤油の匂いでいっぱい。キャンディで誤魔化されていたお腹は空腹感を思い出したようで、もう一度わたしのお腹は悲鳴をあげた。

「おっ、景気いいねえ！ 腹ペコ大歓迎だよ、葵亭特製チャーハンまであと三十秒！」

白のタンクトップにデニムのショートパンツ姿の葵さんは、手際よくフライパンからお皿にチャーハンを移している。失礼にならないように、そっとその横顔を見つめてみる。流した前髪をピンで留めている葵さんは、メイクなどしていないように見える。それでも、十分に綺麗な人だということが分かった。

「何人前ある？」

「ざっと三・五人前」

颯斗はリビングに置いてあったケージ内に、そっとクロを下ろす。そこにはキャットフードやお水、おトイレに猫用のクッションなどが用意されていた。きつとクロのために、みんな準備していたのだろう。

「そっか、じゃあ俺の分はユキにあげて」

颯斗がわたしをダイニングテーブルに座らせながらそう言うのと、葵さんはニヤニヤと口元を緩ませる。

「ふうん、ユキちゃんっていうんだ。颯斗のオンナかあ」

「あの、わたしそんなんじゃない……」

「わたしのことは葵ちゃんって呼んで！ よろしくねユキちゃん！」

颯斗の言う通り、葵ちゃんは嵐のように全てを自分のペースに巻き込んでしまうだけの力があるみたいだ。

戸惑いつつも、わたしはこくりと頷いた。

「おいしい……！ 今まで食べたチャーハンの中で一番おいしい！」

完成したチャーハンを食べ、わたしは感動していた。

程よく香ばしい、パラパラのチャーハン。卵もふわふわのままで、口の中に入れるとお醤油の香ばしい香りと合わさって甘みと旨みを引き出すようで。それは決してお世辞でもない、心からの感想だった。

この瞬間を収めなきゃ！

不意にそう思い、手が勝手にポケットの中を探る。しかし、そこにはもちろん何もない。公園で感じた焦燥感を思い出し、わたしはぶるりと身震いをした。

だけどその様子は、誰にも気付かれなかったらしい。

「もーっ、ユキちゃんかわいい！ 大好き！」

隣にいる葵ちゃんに抱きつかれ、その腕の温かさにふと泣きそうになってしまった。

自分が誰なのかも分からないわたしのことを、当たり前のように受け止めてくれる人たちがいるなんて。ここに連れてきてもらえたわたしは、とても幸運だったと思う。チャーハンを食べながら聞いた話によると、この一軒家は葵ちゃんの叔父さんの家なんだそうだ。海外転勤で空家になるということで、葵ちゃんが大学生になるタイミングで引っ越してきたらしい。

「大学からも近いし、ちょうどいいなあって思ってたね。最初はひとりで住んでたんだけど、ちょっと広すぎて。それに物騒でしょ、女子一人じゃ」

「葵なら野生のクマが襲ってきたって平気っしょ！」

テーブルの下、悠の足に葵ちゃんの蹴りがヒットする。痛がる悠を置いて、葵ちゃ

んは話を進める。

「それで、まず颯斗のことを誘ったんだよね。部屋が余ってるから一緒に住まない？　って」

颯斗を見ると、彼は頷く。

「葵と俺は学年は違うけど、中学時代からの付き合いなんだよ。腐れ縁みたいなもんで、まだ部屋が余ってるっていうから同じ大学だった悠を誘ったわけ」

現在、葵ちゃんは大学三年生。颯斗と悠は大学一年生ということだった。この家にはさらにもうひとり、源<sup>げん</sup>さんという男性も暮らしているらしい。世界中を巡るバックパッカーで、日本には一年に一度戻るか戻らないかとのことだった。

「それじゃあここは、シェアハウスみたいなところなの？」

わたしの質問に、三人は顔を見合わせて首を傾げる。

「シェアハウス？」

「えっと、みんなと同じ家で暮らす、みたいなの……」

もしかして、もうシェアハウスという言葉自体古いのかな。そんなことを考えながら言い直すと、三人は同時に頷く。

「そうそう、そんな感じ！　恋人でもない男と暮らすなんておかしいとか言われることもあるけど、何も知らない人にどう思われても構わないと思ってるんだ」

葵ちゃんはそう言いながら、缶ビールをぐいっと飲む。二十歳の葵ちゃんは、とても大人に見える。

「人間関係の形なんて、人それぞれだよ。今のわたしにとっては、ここにいるみんなが大事な家族！」

両手を大きく広げた葵ちゃんに、悠が「酒臭い」と顔をしかめ、颯斗が呆れたように笑う。それから葵ちゃんは、わたしの頬を両手で優しく包んだ。

「ユキちゃんもさ、好きだけうちでいいんだからね」

きっと、颯斗たちからわたしが何も覚えていないことを聞いていたのだろう。その声があまりに優しく、わたしの瞳にはじわりじわりと涙が滲んでいく。

そんなわたしの頭を、颯斗が笑いながら優しく撫でた。





人間は順応する生き物だと、以前誰かが言っていたような気がする。

この家に来た日の夜は、不安でなかなか寝付くことができなかった。

二日目になると、みんながどんな性格なのかがなんとなく分かるようになった。

三日目には、ただで置いてもらい、ご飯も食べさせてもらっていることに申し訳ないと思うようになった。

四日目は家事を手伝いたいと申し出て、五日目には初めて葵ちゃんにオムライスが食べたいとリクエストすることができた。

そうして気付けば、この家に來てから一週間以上が経過していた。

「颯斗、朝だよ。朝ご飯も、もうできてるよー」

ここは、颯斗の部屋。ベッドの中で丸くなっている体を、布団の上からゆさゆさと揺らすも彼は構わず眠っている。最初の頃こそ心配したこともあったけれど、今ではもう、朝が弱いだけだと知っている。

やつのことで颯斗を目覚めさせ下に降りれば、お玉を片手にした葵ちゃんが笑った。

「颯斗の寝起きの悪さ、尋常じゃないでしょ？」

「絶対にひとり暮らしできないと思う。遅刻ばかりで留年しちゃうよ」

わたしがそう言う横で、颯斗は大あくびをしている。

意外にもこの家で一番早起きなのは悠で、毎朝庭でラジオ体操をしている。何度か誘われたけど、わたしに朝からそこまでの元気はない。

「ユキちゃん、ココア飲む？」

「うん、飲みたいー」

葵ちゃんは毎朝ココアを飲んでいて、わたしの分も一緒に作ってくれる。

探り探りではあるけれど、ここでの生活にも少しずつ慣れてきた。

記憶がないことへの不安。そして時折襲われる、何かがない、という焦燥感と戦うことはあるものの、どうにか正気を保っていられるのは、葵ちゃんに悠、そして颯斗と一緒にいてくれるからだ。

49 またね、わたしの世界にいないきみへ

平日の昼間、颯斗と悠は大学に出かける。大学三年生の葵ちゃんはそんなに講義が

ないらしく、わたしは彼女とクロと共に時間を過ごすことが多い。葵ちゃんや悠が出かけるときには颯斗が必ず家にいて、わたしがなるべくひとりにならないようにしてくれていた。

そんな心遣いを申し訳なく思いながらも、いつもほっとしている。

作ってもらったココアを一口飲むと、颯斗が声をかけてきた。

「ユキ、今日の午後少し出かける?」

やっと目が覚めてきたのか、コーヒーの入ったマグカップを手にしている。

「えっ、いいの? 大学とかバイトは?」

「午後は休講。バイトは今日休み」

「やった!」

どこに連れていってくれるのだろう。わたしがわくわくと胸を躍らせていると「ひゃっ!」という葵ちゃんの悲鳴にも似た声が響いた。

「教授に手伝い頼まれてたの忘れてた!」

ガタツとテーブルから立ち上がった葵ちゃんは、バタバタと廊下へと走っていく。どうやら大事な用事を忘れていたらしい。しばらくすると「すみません! これか

らすぐに向かうので、十五分遅れくらいでは入れるかと。はい、はい……、よろしく願います!」と電話で話している声が聞こえてくる。

この家には固定電話が引いてあって、葵ちゃんはそれを使っている。

いつでも使っているよとは言われているけれど、今のところそんな機会はない。

戻ってきた葵ちゃんは洗面所でメイクをしながら「ユキちゃんごめん! 颯斗が帰ってくるまで、ひとりでも平気?」とわたしに質問を投げかける。

今日は颯斗も悠も、これから大学に行ってしまう。今までひとりで留守番をしたことはなかったけど、この家にもだいたい慣れてきたし、実際にはほんの数時間だけのことだ。

「大丈夫だよ、洗濯とかしておくね」

わたしがそう返事をすると、いつものように「ユキちゃん大好き!」という声が返ってきて笑ってしまう。

わたしの隣では、颯斗が少しだけ心配そうに首を傾げた。

「本当に平気?」

「大丈夫だよ、小さい子供じゃないんだから」